

打ち、帰途水戸の県庁に復員届を出し、なつかしの石岡に帰る。

母、妹に五年振りの再会を果たしたが、海軍通信兵を志願した弟の輝男の姿は無かった。昭和二十年二月十七日、小笠原古関において潜水艦と運命を共にしたと聞かされた。

捕虜三年の貴重な体験

佐賀県 高田勝 巳

早や戦後六十一年目の冬が訪れます。冬を迎える夜にシベリアでの悲惨な思い出が目に浮び、戦争の悲劇に胸が痛みます。

私は大正九（一九二〇）年六月七日、佐賀県鹿島市大字山浦の農家の弟妹三人の長男として生を享けました。両親を助け、米と麦の耕作に従事していました。昭和十二（一九三七）年七月七日、支那事変が勃発し、農村の青壮年にも赤紙の召集令状がきて、働き手が次々と出征して行きました。その度に隣近所の人々は日の丸の小旗を持って出征兵士を送りました。私も出征兵士を見る度に早く兵隊になりお国のために少しでも役に立ちたいという気持ちでいっぱいでした。

昭和十五年六月中旬、鹿島市の中正閣で徴兵検

査を受け、残念ながら乙種合格がつかりしました。しかし先輩の人達から「乙種であつてもすぐ召集令状が来るぞ心配するな」と励まされました。支那事変の戦火は、広い支那全土に拡大し、世相は、子供を生めよ殖やせよ、食糧は増産々々の合言葉で騒がしくなりました。

昭和十六年七月十三日、赤紙召集令状がきて、それには「七月十七日、久留米第五十四部隊に入隊せよ」とのことで、入隊までわずか三日しかない慌ただしさでした。急ぎ入営準備に掛りましたが、いよいよ日本の若者として御国のために召されたという嬉しさで三日間は「あつと」いう間に過ぎました。

両親は働き盛りの長男がいなくなり、家業に困ると思ひながらも、近所から次々と若者が出征して行く時に、我が家からも出征軍人を送り出すことは家門の名誉でもあると思ひ「体にくれぐれも注意して頑張れよ」と言葉少なにいつてくれました。

た。しかし心では泣いていたのではないかと思ひます。

十七日鹿島駅からは三人が出征しました。在郷軍人や国防婦人会の方々、近所の人達、親戚身内の者などの盛大な見送りを受け感激しました。万歳万歳の声を聞き「頑張ります。ありがとうございます」と心に誓い手を振りました。

久留米第五十四部隊は陸軍の輜重隊で、入隊すると高良台の演習場にある兵舎に連れて行かれ、ここで三個中隊に編成されました。私は独立輜重第七十中隊の飛永中隊に編入され、中隊長は陸軍中尉飛永正人でした。

七月二十一日、部隊本部に帰り、二十五日に中隊創立記念日の祝賀式典が挙行されました。兵隊としての教育も中途半端で、兵隊用語もろくに覚えないうちに移動を命ぜられ、八月九日、荒木駅を列車で出発、夕方門司港に到着、門司港で二泊して十一日に輸送船に乗船しました。

当時は空襲はなく、ただ海上での襲撃を警戒して駆逐艦の護衛で演習しながら玄界灘を北上、四日かかって大連港に入港しました。玄界の波は荒いと聞いていましたが、幸い四日間は波静かで船酔いもなく、十四日昼ごろ大連港に上陸しました。十五日臨時列車で大連を出発、奉天（瀋陽）、新京（長春）を経由して四日目に虎林に到着しました。

いよいよ北満州の第一線「虎林」に着いたか。私達は下車すると隊列を組んで「八方台」まで約四キロの行程を行軍しました。行軍しながらこのソ満国境警備が私達の任務かと思ひ、身の引き締る思いでした。部隊名は満州城第六七五三部隊でした。八方台に着くと、まだ兵舎がありませんので直ちに幕舎作りが始まりました。

突然空が黒くなり雹が降って来ました。大きな雹のため一時作業を中止しましたが、八月に雹が降るとはさすがに満州だと思ひました。幕舎生活の中では冬を迎えられないので本格的な兵舎作り

が始まりました。材料は南満州からの木材を満州人の職人によって組み立て、南側は日当たりがよく北側は寒さを防ぐように建設されました。建物の中にはペーチカが設置され、完成したのは十月中旬でした。新しい兵舎に入るのは入りましたが、北満州の十月は肌寒く、建物の中の設備が完備するまで寒い思いをしました。

私達の訓練は兵舎作りの手伝いを兼ねて実施され、一期の検閲まではと頑張りました。私は風邪で熱発したため、十一月一日から病院に入院しました。病院は、善通寺師団関係の病院で立派でした。七十日間入院生活をし、一月十日に退院しました。その間初年兵教育を受けることが出来なまま一期の検閲は一月二十日で終わりました。

市川小隊長は厳格な方で、入院した者は進級させないと厳命され、私は進級出来ませんでした。口惜しい思いでいっぱいでしたが、その後も一生懸命任務に服しました。その努力が認められてか

一カ月遅れの二月二十日一等兵に進級しました。長崎県出身の古兵から「心配するなこれから先その遅れを取り戻せばいい」と激励されました。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃のニュースは、入院中の陸軍病院で聞かされ、入院中の兵たちと共に手を挙げ興奮しました。退院後の北満の敵冬は身にこえました。虎林はウラジオストックの北東部に位置し、ソ満国境の重要な陣地の一つでした。八方台の陣地からはソ連兵の姿が肉眼で見ることが出来ました。春の訪れは五月下旬ごろで、大地は三十センチぐらいの深さまで凍っており、六月になり雪解けの時期になると川も大地もどろどろのぬかるみになり流れ始めます。

昭和十六年四月、日ソ中立条約が締結され、ソ連軍は独ソ戦に主力を注ぎ、そのためソ満国境線の警備は少ない兵力のように感じられました。そのような状況下でも警備を怠ることは許されません。夜間一時間交代で歩哨に立ちます。時には狼

の遠吠がしますと近くの満人の家の牛馬も鳴を潜め、無気味さを感じます。急いで衛兵所から懐中電灯を持って来てもらいます。狼は光を恐れるからです。七月になると大陸性気候で焼きつくような暑さが続き、十月になると肌寒さを感じるようになります。北満の夏は三カ月ぐらいで、秋はすぐ通り越して冬になります。

昭和二十年五月、ドイツ軍がソ連に無条件降伏しますと、その兵力を極東に集中し、その気配は毎日監視する私達兵隊にも察知することが出来ました。

昭和二十年八月九日未明、ソ連軍は一方的に日ソ中立条約を破棄し、宣戦布告を行い、虎頭、虎林へソ満国境を越え、怒濤のごとく満州へ雪崩れ込んで進撃して来ました。当時、私は奉天の通信下士官集合教育に参加していましたが、ソ連軍の対日宣戦布告の報に直ちに解散となり、参加者は原隊に復帰を命ぜられました。

私も奉天駅より北上、「黄道河子」という所で戦争に参加しました。破竹の勢いという言葉がありますが、特にソ連軍は戦車群を先頭に破竹の勢いで襲いかかって来ました。その勢いにさすがの関東軍も押しまくられ撤退に次ぐ撤退でした。

八月十五日は雨が降っておりましたが、ソ連空軍機の空襲を受けました。終戦の詔勅は知りませんでした。この地方には白系ロシア人が多く住んでおり、同じ民族だから白系ロシア人宅に避難せよとの命令で避難しましたが、ソ連空軍機は爆撃してきました。

十六日も同じように空爆してきました。十七日朝になって日ソ停戦協定が成立したとの報で、私達は山から降りますと日の丸とソ連国旗を立てた戦車が轟々と音を立て南下して来ました。その状況から私達は、停戦協定はデマで、多分ハルピン辺りで停戦協定の調印が行われるのであろうと、軽く考えていましたら無条件降伏だと知らされ

つくりしました。

十九日「羅鶴」という所に集結させられ、広場で武装解除を命ぜられました。その中にはソ連軍と交戦した生き残りの兵隊もありました。武装解除させられる時の口惜しさと残念さは言葉ではいい尽せない情けない思いでした。日本もこれで終わりかと思いました。

こんなことになるくらいなら関東軍特別演習のあの時点で一挙に攻め込んでおけばよかったと、返す返すも残念に思ったのは私一人ではなかったと思います。

その時、ソ連軍は日本軍の兵隊をウラジオストックから日本へ帰すとの、紳士的な申し入れがあり、その言葉を信用して指揮官も了承したと聞いていましたが、後でウソであったということが判明し、指揮官も残念がられたとのことでした。

私達はこの「ウソ」にだまされて九月四日シベリアの「ロカシヨウカ」という所に一番乗りをさ

せられました。宿舎の建物はありませんので露営でした。川の辺でしたから柳の枝を切ろうとしたので、手でもぎとり、露のかららない程度に覆いを作り、一夜を明かしました。翌日から草刈り作業の強制労働が始まりました。

ソ連はどんな仕事でもノルマが課され、ノルマに達しないと給与が減らされます。私達はノルマが達成出来ないと言事減らされます。そのノルマが厳しく夜間作業のノルマが達成出来ないと言、明けて十一時までも働かされ、へとへとに疲れて帰って来て、夕方五時にはまた作業開始、働かざる者は食うべからずの原則で、過酷な強制労働の繰り返しが続きました。

パン三〇〇グラム、米三〇〇グラムが一日の食糧と決定されているのに、小さなパンとお粥のよいうな惨めな食事しか与えられず、働け働けと酷使するので、腹が立ちますが食べなければ働けませんと我慢しました。短い夏は草刈り作業と農作業

で、寒くなると山に入り伐採作業が始まります。

私達はグループごとに小さな掘立小屋を造り、その小屋で生活します。寒風も防げず山の木を採って来て暖を取りますが、明け方には冷え込んで、身震いする有様で憐れな毎日の生活でした。零下一〇度、二〇度の厳寒の中での作業は大変で、防寒服は着ていますが辛い作業でした。

積雪を除雪しながら山に入り、空高く延びている木を鋸や斧で切り倒し、倒れた木の根元の雪を深く掘り、その間に樁を入れて縛り、馬に引かせて集材所まで運搬する作業です。初めての慣れない作業の上、少量の食事で空腹の私達には辛い作業でした。それだけにノルマは上昇せず、最低の食事しか与えられません。寒さを防ぐため柳の木を積み重ねた上に草を丸めて敷き、寝る時は草藁をかぶって寝ます。それは豚が豚小屋から頭だけを出して寝ている格好と全く同じで、これが関東軍のなれの果てかと悲しくなりました。

春になると草刈作業から乾燥コンプレッス作業、秋には農作物の収穫作業で十月には寒くなり地下壕を掘って少しでも寒さを防ぎながら寝ました。

ソ連が満州国から取ってきた種々の戦利品や農作物、工業製品等を駆で荷降ろしや積み替えする作業は時間に制限があるため辛い作業でした。ある時は昼間から夜通しの作業となり、疲れ切った体を互いに慰め合って時を過ごしたことも度々ありました。お粥をすすり込んでの重労働に体力は衰え気力はなくなり、昭和二十年の越冬中には中隊の人員の二五%ぐらいが倒れ死亡しました。

またかまたかと、死亡する戦友を川端まで行って合掌するだけでした。何と哀れなことかと何度思ったか分かりませんが、この方法しかありませんでした。

死亡者続出のため人数は減少し、作業は困難を増し、加えてノルマは厳しく、精神異常になる者も出てきました。積み替え作業が終わると、私達

はコルホーズ(集団農場)に移動させられました。

この作業は、収穫した大豆や小麦等の脱穀作業でした。この作業は私には手慣れた作業でしたから少しは楽でした。

久方ぶりに入浴が許された時、みんな身体を見て哀れに思いました。日本人として堂々たるあの立派な体格はどこにいったのか、涙の出る思いで眺めました。

私達は「オロシロク」という町に移されました。

この町は煉瓦工場の建ち並ぶ小さな町でした。ここの作業は煉瓦工場での作業でした。この作業は夏の仕事で、昼夜三交替で、煉瓦作り、乾燥する倉庫等七十八棟もある大きな煉瓦工場でした。

倉庫には夏の間で作った煉瓦を詰め込み、夏の建築作業に使用する準備でした。冬の屋外作業の出来ない時は煉瓦焼き作業もさせられました。冬は材木の伐採作業、夏は煉瓦焼きと、ソ連の夏と冬の作業の区別に感心しました。

冬の大きな落葉松の伐採は、一本の大木に三人一組で、二人が長さ二メートルぐらいの鋸を両方から引き合せて木を切る、一人は斧を待って倒します。倒れた木の枝葉を斧で切り取り、倒れた木は適当な長さの所の雪を除雪し、そこに橇を入れてロープで括り、その橇を馬で引つ張る。こうしてどんな大木でも集材所まで容易に運搬することが出来、これが冬の作業として私達捕虜に課された仕事でした。

直径一メートル五十センチもある大木は夏であれば、人間の力では起すことは出来ないが、冬ならば雪を掘るだけで橇で運ぶことが出来る。運んだ木材は製材して夏の建築に使用出来るという方法です。

行く先々で宿舎がないので、私達が山で集めた木で二階建の簡単な建物を造り、土間は寒くないように暖をとれるように考えます。零下一〇度以下に下がる寒さの中で、寒さに震えながら粗末な

食事を摂りノルマに苦しまねばならない毎日でした。朝は六時起床、粗末な朝食を食べて八時から午後一時まで、昼食を食べて夕方六時まで働き、夕食は八時ごろになり点呼を受けて寝ます。

食べ物ほど恐ろしい物はありません。少なれば少ないほど公平にしなければ不平が出るので、パンも秤を作って公平に配布し、配分の方法も順序を決めて納得の行く方法を考えました。病気になるっても神経痛や腰の痛み等は病気とは認められず働かねばならず、痛い痛いといいながら働かれました。病気として認めるのは三八度以上の発熱だけで、軍医は女の医者が多く、診療はきびしく、病気では皆が苦しみました。

朝夜点呼はありますが数を数えるのに時間がかります。日本兵なら四列縦隊、四列横隊ですが、ソ連兵は三列か五列で数えます。信賞必罰は厳しく、ソ連兵では下士官が兵に降格するのは珍しいことではありません。悪いことをした兵は坊主頭

になることもあります。犯罪人は坊主頭にされるので分かります。日本兵のいが栗頭を見て日本兵は囚人ばかりだと笑う兵もおりました。

私達の働く場所も何カ所も転々となりました。大工のような仕事、煉瓦作りに煉瓦焼、煉瓦の乾燥、炭坑の仕事、鉄道の工事、畑仕事、材木の伐採等に酷使されました。

昭和二十年の冬から二十一年の酷寒の中で、多くの者が栄養失調になり死亡者も多く出ました。

二十二年からは民主教育なるものが始まり、共産主義の利点、日本帝国主義の排除等が指導者と称する人達の教育目標でした。「日本新聞」という日本語の新聞も昭和二十一年後半ごろから配布されました。その中には日本本土のニュースが掲載されており、初めのころは無関心でしたが、佐賀県伊万里地区の災害記事が掲載されていたので、佐賀県人である私は注目しました。復員しましてからそれが事実であったことを確認しました。

昭和二十二年に入りますと、私達も次第にシベリア慣れしてきました。気候風土にも慣れ、食事も相変わらず粗末で少量でしたが腹が慣れてきて、最初のころのようなひもじいという感覚が少なくなりました。習うより慣れるの言葉通りロシア語も少し話せるようになり、地方人にタバコやパンを分けてくれとねだることも出来るようになり、新聞紙で巻いたタバコやパンをもらう仲間もおりました。

苦しければ苦しいほど日本は今どんなになっているかなあ、故郷の親たちはどんなにしているかなあと考え、涙が流れることもありました。なぜ終戦になって我々はこんなに苦しまねばならないのかと、何回歯痒い思いをしたかわかりません。ソ連を恨めしく思ったこともありました。飢えと寒さのため言葉も出ずに死んで逝った戦友達、お経一つ聞かず川原に転がされ、形だけの砂や草を被せて葬られた戦友達の無念さを考え、ご遺族の

皆様のお気持ちはどうか、戦争らしい戦争もしていないのにと考えますと、たまらない憤りを感じました。

十一月八日はソ連の解放記念日としてご馳走とは名ばかりの食事を与えられました。航空隊の中の修理作業をさせられたこともありました。作業をしながら航空機の訓練や落下傘の降下訓練も見ましたが、別段警戒する様子もなく解放的であったことも印象に残りました。

ソ連兵が飛ぶ飛行機を見て日本にはあんな飛行機はあるのかとか、列車を見ればあんな列車は日本にあるのかと聞くのを見て、ソ連兵の教養はこれぐらいのものか、だから共産主義社会がこの国では成立つのだと笑って話し合ったこともありました。

昭和二十三年十月ごろ、この仕事を終えればお前達は日本に帰れるぞと、現場の監督から言われて「日本に帰れる」という期待感に胸をはずませ

ました。

ナホトカの収容所には、第一、第二、第三、第四収容所があつて、第四収容所は船着場の近くにありました。ソ連各地からナホトカ港に集結し、第一収容所から逐次第四収容所に移されて、ダモイ船（帰国船）に乗船して出港する順序のようでした。

私達は十一月十八日、ナホトカの第四収容所に運よく入所することが出来て、やっと日本に帰ることが出来ると喜びました。日本に帰国のために軍服の他に予科練の服と編上靴をもらいました。日本は物資が不足し列車等で盗られることもあるので用心せよと、注意されました。

昭和二十三年十一月二十三日、引揚船としては最後のころ、タンカー船を改造した「山澄丸」という小さな船に乗船し、ナホトカ港を出港することになりました。いざ出港となると別れ難い妙な気持ちになりました。丸三年余り辛い苦しい生活

であっただけに、また残して来た戦友達の遺体のことが、帰れる喜びと入り乱れ、後髪が引かれる思いがしました。

船内で食べた日本食のうまかったこと、二十七日舞鶴港に入港、前方に見える美しいきれいな青々とした故国の山々、シベリアで禿山と雪山だけを見て来ただけに、懐かしさと嬉しさに戦友と抱き合って喜びました。故国の土へ第一步を印した時の嬉しさ、夢にも忘れ得なかった日本に着いたと、大声で叫びたい気持ちでした。舞鶴で三泊し、二千円の金をもらい、故郷の鹿島へ着いたのは十二月一日の夕方でした。

自宅に帰り、涙を流して喜ぶ母の口から父親の死亡を聞く時がっくりしました。八年振りに帰国して父の死を聞くとは、父親が喜ぶであろうとわざわざロシアのタバコを持って来たのにと、涙が流れ出ました。父の死亡は昭和二十二年七月十七日、五十七歳で死亡したとのことでした。このこ

ろ七月十二日、十三日と不思議な夢ばかり見ていたのも父の魂が伝えていたのではないかとしみじみと感じました。

戦後六十一年、私にとってこんなに得難い体験を味わったことを恨みに思ってはおりません。二度と出来ない貴重な体験、あの苦しみに耐え抜いた忍耐力が復員後今日までどんなに役立ってきたか。